

六島インターンシップ第2期生特集

3月16日(土)六島まちづくり協議会主催の報告会が六島公民館で開催されました。

六島のインターンシップの取り組みについては昨年からの取り組みで今年で2回目になります。

インターンシップとは職場体験と理解しています。主に行われる事例としては企業などに短期・長期で属して一緒に働く中で学生も企業もそれぞれの良いところに影響を受けながら仕事を進める事業です。今では、大二次産業だけでなく農家などの1次産業、そして今回のように地域で受け入れる例も珍らしくありません。

六島のインターンシップ事業の発端の話は長くなるので割愛して…。今年はまだまちづくり協議会としての募集はしていなかったのですが、昨年行った第1期生の松田青那さんの取り組みを見た2人の学生が直接インターン生の募集窓口をやっているNPOエアロノベーションの藤井さんのところに連絡が1月はじめにあったことにはじまりました。



松本一希くん

前橋工科大学の2年生。これまでの鹿児島県の離島トカラ列島や新潟県の農家へのインターンシップの経験のあるチャレンジャーです。
ブログ: 島スタイル
<http://mu-shi-ma.jugem.jp/>
FACEBOOK

二石菜々子さん

鹿児島県出身の奈良女子大学の2年生です。大学では建築や生活空間について勉強されていて、まちづくりにかなり関心がありいろいろと活動をされている方です。
ブログ: 島がーる
<http://ameblo.jp/moshimoshimushima/>
FACEBOOK

六島FACEBOOK: 六島ファン

<http://www.facebook.com/mushimafan>

2月7日から松本君が、18日から二石さんがそれぞれ六島入りして、ホームステイ先である三宅忠信さん宅にお世話になりながら島での活動を行う。

インターンシップを受け入れようという理由の一つに、この2月・3月のシーズンは水仙の時期と重なり、多くの観光客が訪れるために婦人会を中心に公民館を利用して「ふれあい喫茶」を開設し、軽食とくつろぎ空間を演出している。特にそのシーズンの人手がいるためでもある。

松本君は、三宅公民館長と島を歩き回り、趣味でもある写真を取りまくり、一人でも多くの島の方々と話をし、今ある島の宝を残すという作業を進めて来た。また、小学校へも足しげく通い、地域と学校のあり方についてもいろいろと考え行動をおこなっていた。

二石さんは、大学での研究の手法を活かし、住環境に注目。空き家を負の財産としてではなく資源として活用する方法を模索し、空家の調査を進め、特にその状況を模型という可視化できるものをみんなで作ることにより直視する手法を使った。作成場所も小学校の保健室で行い、子供たちもその製作段階に携わった。



3月7日の六島まちづくり協議会の中で、中間報告会を行い、16日に最終の報告会を行うことを決定し、笠岡からも興味のある方をツアー方式で募集することを決めて16日を迎える。

いろいろと不便なかなでの準備にはかなりの苦労が見られました。発表の材料の調達や写真の現像等泊りがけで笠岡に来てすぐに六島に帰る。期間中一心不乱に島づくりに関わる姿はすばらしいものがありました。

そして当日。

笠岡らの参加者はFBのイベント立てで募集し、1週間ぐらいで10名を越え、ケーブルテレビ、新聞社も合わせて総勢18名の応援ツアーとなりました。



当日の報告会のスケジュールは・・・。

三宅会長あいさつ及び2人のインターン生の紹介
インターン生の自己紹介と報告(ワークショップ)の概要説明
・ワークショップ

松本君・・・130枚の松本君が撮った写真を元に、島の方々がその写真に思い出や説明を入れていくというワークショップ。それぞれが写真を選んでその説明を付箋に書いて写真の裏に貼り付ける。

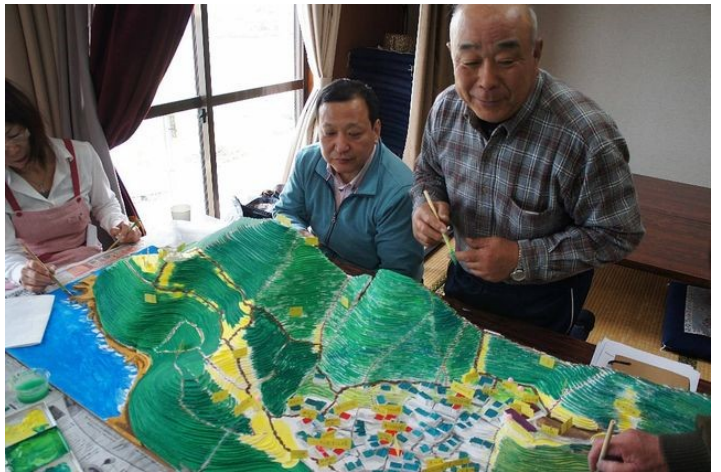
この作業を通じて、単なる場所の写真ではなくそれぞれの思い出の場所や想いのこもった場所になる。

そして、帰るまでにこのコメントをまとめて六島のアルバムを作る計画。

島に来た人が、島歩きをのあとふと立ち寄った休憩所にこのアルバムが置いてあり、それを見て島の人がそれぞれの言葉でガイドをいってくれるようにも読み取れるそんなアルバムづくりが目的のようだ。



二石さん・・・前浦中心の500分の1の模型を作成。灯台やそれぞれの民家も再現している。短時間でここまで作り上げるのは本当に大変な計画性と多くの人を巻き込んだ作業だったと推測される。真っ白のジオラマにワークショップで皆で色を塗ったり、家については住んでいる家と空き家がわかるように色分けしたり、水仙が咲いている場所を黄色。住んでいる家にはピンで〇〇さんの家を表示したり、思い出を書き込んだりという作業を行う。この模型を見て島の空き家の現状を可視化して、現状を再認識すると共にその空家を資源として発想を転換し活用策を考えるきっかけとしてもらう。観光客の方には灯台までの起伏や水仙の咲いている場所の確認に活用していただく。



2人のワークショップは関連しているので並行して行い、参加している島の方、笠岡らの応援団もかなり盛り上がり協働作業に取り組んでいた。自分達の知っていること、思い出をたどってそれを書き込んでいく作業をする島の方々のうれしそうな表情はこれまであまり見ることが無かった。てっぺんの神様の説明には「お金持ちになる神様」とか「昔ココにカブトムシを取りに行った」とかのメッセージが添えてあった。12時 昼食(情熱カレー) 婦人会の皆さん手作りのカレーとサラダをいただきながら笠岡からの応援団の自己紹介タイム。その後、もちろん島の皆さんも自己紹介。



午後1時からフィールドワーク

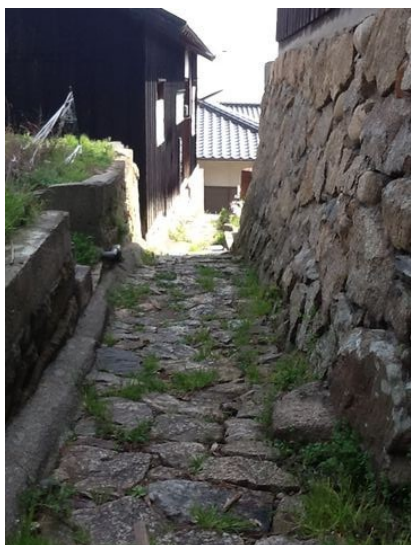
・松本君は湛江中心に街歩き

大鳥神社で絵馬づくり・湛江の整備した展望台へ・そして町並み・てっぺんの神様へ・小学校などを・・



・二石さんは前浦中心に街歩き

前浦の町並みを歩く。古民家、崩壊寸前の家、石畳の道、井戸のある風景、巨石で積み上げた石垣、家越し、路地越しに見える瀬戸内海などを堪能しながらあるく。満開の水仙も見学。



それぞれの街歩きに島の方も同行し、何気ない風景に笠岡らの参加者が興味を示す光景が心地よいのか、知らず知らずのうちにいろいろな話が次から次へと出てくる。街歩きガイドってこんなことなんだなと実感する。

午後2時 街歩きを終えて公民館へ
珈琲とお菓子を各自もらって報告会の席につく。
みんなリラックスしながらいよいよ2人の最終の報告。

松本君の報告からはじまる。
何かが出来なければいけないことをやるより、ひとまず、今あるもの、こと、ひとりでできることをしていくべき！
そこで「第二の故郷としての六島」を提案。

そしてそのために必要な方法を

①つなげる・つづける・・・水仙の時期に来られた人に次のつながりを提供する

②一手間かける・・・自分ができるところを考え実行する

③自分自身が楽しむ・・・やっている人が楽しくないと来る人も楽しくない

そして「六島サポーター」が少しずつ増える。普段島にいないけれど用事があるときに頼りになる応援団。



松本君は六島に入る前に総社の「ちみち」のまちづくりの話聞きかなりの衝撃を受けていた。

そのキーワードで今回のインターンシップをまとめた。

- ・小さなことを積みあげる・・・水仙を育て続ける
- ・地域にあるものを活かす・伝える・・・水仙・灯台・ひじき・びわ・石垣・祠・島の人の話
- ・一手間かける・・・相手を思っている心がけ「もてなしの心」
- ・昔の知恵を取り戻す・・・今の六島があるのは先人の努力・智恵の賜物
- ・魅力は押し付けるものではなく発見してもらもの・・・外からの目線での意見を大切に
- ・足元にあるものに気づく・・・外から来た人がよいと感じるところは多い
- ・付加価値をつける・・・小さいからできること、人が少ないからできることを



次に二石さんの報告

かなり論理的なプレゼンで現状分析から、発想の転換で空き家を厄介者として考えるのではなく、地域資源として考え活用する視点。最終的な目標は存続可能な島とすることである。

現状分析(前浦地区)

定住して住んでいる家 17戸

夏などに一時帰省あり 61戸

全半壊 6戸

合計 84戸

これだけ多い空き家をマイナスで捕らえるのではなく「資源」として・・発想の転換

・空家を貸してくれないと何も始まらない・・・空家の持ち主を調査する。島の現状を伝えるところから

・空家の持ち主の方々への情報提供・・・島はその資源をどう活用したいのか！



空家を利用した企画案

①空家×環境整備

年中を通して仕事がない状態での定住は困難。

「水仙」をキーワードに環境整備と空家活用を結びつけた画期的なプラン。

水仙の植え替えの時期に合わせた長期インターンシップ。

その宿泊用に空き家を活用する。

島の環境整備が島暮らし体験のメニューとなれば空家活用への理解も得られる。

特に大学生等の若者を中心に展開する。

②空家×廃材利用

廃屋に関しては持ち主の了解が得られれば・・・。

廃材を活用してベンチ作り。・・・家主の思い出のベンチ(〇〇家ベンチ)

解体作業には若い世代のボランティアを募り、短期インターンシップも有効。

陸地部へ呼びかけてのベンチ作りワークショップ

総括

現在の六島は何とかみんなの支え合いでかなり大変なことまで出来ている。しかし、次の世代を考えるといつまでも続かない。今元気なうちに次の世代への引き継ぐ方法を考えないと持続は不可能。

今があるのは先人がこれまでに頑張って水道や電気などの導入の取り組みや水仙の植栽などの実践があったから。そして今後島を持続させていくためには、今住んでいる人が次の世代につなぐ取り組みが不可欠。そのためにヒントが空家活用であったり、インターンシップであったり。

2人の提言の後にあえて島の方だけ、全ての人にコメントをいただいた。

笠岡からの参加者を代表して西粟倉村の地域おこし協力隊の東馬場さんから「やっと動き出した感じ」というコメントをいただいた。主体はあくまでも島民。

私自身2人への感謝の意をこめて少しだけ仕込んだことを最後に披露させていただいた。これまで、島で何かイベントごとを行うときには独立採算制はなかなか成立しなかった。島の方に昼食をご無理いったり。しかし、今回は、2人の発表自体に興味を持っていただき10名を超える方が参加表明をしていただき、報道の方も含めて参加費を2000円いただいた。そして、このお金を原資として「六島応援ファンド」の提案をさせていただいた。そして、いろいろと頑張ってくれたメンバーを代表して三宅館長にそのファンドの会長「応援団の会長」を一方的に指名させていただいた。これまでのインターン生の提言を整理し、できることから実現していく資金、人材、物に活用していただくことを狙いとしています。

私らしく駄洒落で六島応援ファンド「ファンド灯台」。灯台に濁点を打って「どうだい！」と読みます。二人の提言にもありましたが人をつなぐ仕組みとして活用できたらと思っています。



インターンシップ事業は多くの方々の協力で成り立っている。特に毎回ホームステイをお願いしている会長さん宅の全面的な協力があるからこの事業が何とか実施できるといっても過言ではない。会長の奥様が「息子も娘も良く頑張ったでしょう！」と涙ぐんでおっしゃった言葉が全てを物語っている。一生懸命だからこそ感動を呼び、感動が無ければ人は動かない。いろいろな人がこの事業に積極的にに関わり、自分に何ができるか考え、2人の提言をどんどん進めていく原動力になることを期待しています。

あくまでも、インターンシップをすることが目的ではなくて、その過程で多くの方が関わることを、提言を受けた内容を島の中で議論すること。人ではなくて自分ができることを、自分が率先してやる必要があると思っています。次はどうかはわかりませんが、大いに議論してみんなで決めて欲しいと思っています。



写真は笠岡からツアーに参加された植田さんの写真を転載させていただきました。植田さんの写真はこちらをどうぞ！

<http://www.facebook.com/media/set/?set=a.439827729429817.1073741828.100002077812584&type=1>